

体験と認識

——夢野久作『ドグラ・マグラ』の構成について

田 中 雅 史

Experience and Recognition :
The Composition of *Dogura Magura* by Yumeno Kyusaku

Masashi TANAKA

Abstract

Dogura Magura (Going Around in Circles) is a long fiction written by Yumeno Kyusaku. It is an eccentric story told by a mental patient, dealing with the fearful figure of the modern civilization and what is the true nature of humanity.

Dogura Magura begins with a man (the narrator) who wakes to find himself in a small room of a mental hospital. He has lost his memory. A man called Dr. Wakabayashi takes him to an office, where the doctor shows him many things including a story entitled *Dogura Magura* and Dr. Masaki's testament. Dr. Masaki is a genius scientist who presented a new theory of psychology named Sinri iden (psychological heredity). The outline of this theory is given in his testament. He asserted that human embryos dream about their ancestors' experience in the womb, and that mental disease comes from this memory. I don't think that Kyusaku believed in the theory he had created in the novel, but the reader can grasp the depth of human psyche through this theory.

The composition of this novel is remarkably complicated, which also convey Kyusaku's message. The narrator of *Dogura Magura* finds a story entitled *Dogura Magura* in the novel. *Dogura Magura* has confusions of timeline. The reader can recognize the mystery of human psyche through the experience of such dizziness.

はじめに

夢野久作はその数多くの作品を通じて、人間の心を描き出そうと努めた。彼の考えによれば近代社会や科学文明というものは、人間の心に対する間違った考えに基づいているものであった。人間の魂の深みには、科学的合理性では推し量れないものがある。彼は「唯物文明」「唯物功利道德」といった言葉で、その浅薄さを批判した。そして極限的な状況を舞台に、人間の心の深みとそれを排除して成り立っている近代社会の冷酷さを読者に示そうとした。

彼の最大の作品である『ドグラ・マグラ』も、そのような意図の下に書かれ、それが作品の構成にもはっきり表れている。ここでの極限的な状況とは、自分が何者であるかを忘れてしまった精神病院の患者という状況である。冒頭と末尾にブーンという同じ柱時計の音があり、作品全体がこの音を聞いた一瞬に想起された彼の記憶であるという話である。

『ドグラ・マグラ』は、途中で主人公が『ドグラ・マグラ』と題された原稿を読むという形で主要な部分が語られる。自分が何者であるかを捜す主人公の一人称で語られるこの物語は、読者を主人公と共に、人間精神の深部と近代社会やその生産物である科学的知性の織りなす迷宮——ドグラ・マグラ——の解読作業へといざなうのだ。

この論文ではこのような構成が読者に要請する「解読」への方向づけに着目して、『ドグラ・マグラ』のデコダージュを試みたい。

フランス語からきたデコダージュ *décodage* という言葉は「コードを解読 *décoder* する」と「コードから脱出する、脱コード化する」という二重の意味を掛けてしばしば用いられるが、『ドグラ・マグラ』が要請するのも、解読作業であると同時に、支配的なコードから逸脱する体験であると思える。したがって、やや繁雑ではあるが、この論文では片仮名のデコダージュという言葉の時折使用したい。

1 『ドグラ・マグラ』の構成

主人公の名前は最後まで明らかにならないが、文中に出てくるアンポンタン・ポカン君というニックネームの患者が主人公であることは間違いなさそうなので、この論文では主人公をポカン君と呼ぶことにする。ブーンという時計の音と共に意識を回復したポカン君は、自分が誰だかわからないことに気づいて愕然とする。隣からは自分を兄と呼ぶ女性の声が聞こえ、やがて若林と名乗

る男が現れて、ポカン君を連れだし、身支度を整えてくれる。彼がいる場所はどうやら九州帝国大学の精神医学科で、彼はずっと正気を失っていた患者らしい。若林博士はポカン君を精神病科の図書室兼標本室に連れて行き、そこであれこれ見るうちにポカン君の注意は「五寸ぐらいの高さに積み重ねてある原稿紙の綴り込み」に引き寄せられる。

その次のページに黒インキのゴシック体で『ドグラ・マグラ』と表題が書いてあるが、作者の名前はない。

一番最初の第一行が・・・ブウウ——ンンン・・・ンンンン・・・という片仮名の行列から始まっているようであるが、最終の一行が、やはり・・・ブウウ——ンンン・・・ンンンン・・・という片仮名の行列で終わっているところを見ると、全部ひと続きの小説みたような物ではないかと思われる。なんとなく人を馬鹿にしたような、キチガイジミた感じのする大部の原稿である。¹⁾

どうやらその原稿はポカン君に関わりがあるものらしく、若林博士はその原稿が一人の若い大学生の患者（若林博士の話す内容から、読者にはそれがポカン君当人らしいことがわかる）によって書かれたこと、ドグラ・マグラという言葉の由来などを話し始める。そして『ドグラ・マグラ』の内容を項目に分けてポカン君に示すが、それは精神病院の現状を唄うお経の文句、胎児を主人公とする夢に関する学術論文など、久作が書いた『ドグラ・マグラ』自体にほぼ対応するものである。

ポカン君は変なものを読んで頭を混乱させられたくないと、その原稿を読もうとしない。次に若林博士は同僚の正木博士の研究について話し始める。その内容は、さきほどの『ドグラ・マグラ』とほぼ重なっているのに、ポカン君は不思議なことに全くそのことに気づかない。やがて正木博士の遺稿であると若林博士が手渡した書類の束を、ポカン君は夢中になって読んでいく。そこから小説『ドグラ・マグラ』の主要な部分が始まるのである。

すでにこの段階でいくつかの謎が出現している。読み終わった後で振り返ると、原稿紙の『ドグラ・マグラ』をポカン君が読み始めたように錯覚しやすいが、若い患者の書いた原稿紙の綴り込みと若林博士の手渡した書類は別であ

1) 『夢野久作集』230頁。

る。別であるが中身はどうやら同じものだろうと推測される。このようなことが現実にかかることはまずあり得ない。また、原稿の『ドグラマグラ』と正木博士の研究が対応しているのに、ポカン君がそのことに気づかずにいるのも変である。

これは夢の中で体験するような状況といえる。夢の中では気がかりなことがあると、それが形を変えて繰り返し現れるということが起こりうる。そして、目が覚めている時なら奇妙に感じることも、平気で受け入れるということもありがちである。この点は、作中の「胎児の夢」という論文でも触れられている。

その[夢の]千変万化がいかに突飛な、辻褄^{つじつま}の合わないものであろうとも、その間に何等の矛盾も不自然も感じない。のみならず現実式の印象よりもかえって自然な、深刻、痛切な感じを受けるように思うのは当然のことである。²⁾

この箇所は、今述べた原稿に関するパラドックスを解く鍵を読者に与えてくれる。後でポカン君自身が気づくように、彼はこの日の後半は幻覚を見て現実と錯覚する「夢中遊行」の状態に陥った。この時点ですでにそれは始まっているものと見るべきだろう。あるいははじめに述べたように、この作品全体がブーンという時計の音を聞いた一瞬の夢³⁾であるわけだから、こうした細部の夢の中のような整合性のなさが生じてくるのかもしれない。

この『ドグラ・マグラ』の原稿に関する錯綜は、読者の興味を惹くためだけに書かれたのではない。『ドグラ・マグラ』を通じて久作はあるメッセージを伝えたかったと考えられる。それは、人間の心が普段意識している表層とは別に、奥の複雑な部分を持っていること、それが人間の生きている現実にも関わっているということである。そのことが見過ごされていることによる弊害が、近代社会において顕著になっていると久作は考えた。ここで原稿をめぐるパラドックスが作中の『ドグラ・マグラ』の前に置かれたのは、読者をとまどわせ、この話のテーマである人間の心の世界へと注意を向けるきっかけを与えるため

2) 同書、379頁。

3) 『ドグラマグラ』執筆のごく初期の日記に「常人の解放治療の第一篇を、自我忘失症より書き起して、全部を夢の姿にせしと思ひしが、(後略)」とあるように、『ドグラマグラ』は全体が夢である話としてはじめから構想されていたと考えていいだろう。杉山龍丸編『夢野久作の日記』(昭和51年、葦書房)、179頁。

ではないかと思われる。

また、久作は若林博士の口を借りて、はじめは若い入院患者の原稿の項目として、次に正木博士の遺稿の内容として、読者が異様に感じる形で二回繰り返して『ドグラ・マグラ』の内容を読者に説明している。これは今述べたように、夢の中と考えれば説明がつくが、このように繰り返し強調する理由として、彼が一般には受け取られにくいであろう自分の主張を、読者に正確に読みとってもらおうとしたことが考えられる。こうした細部への配慮をともなつて、テキスト内テキストとしての『ドグラ・マグラ』がポカン君によって読まれるという構成がとられ、読者は主人公が行う作中の『ドグラ・マグラ』の「解説」を共に体験するのである。

2 文明社会と精神病

作中の『ドグラ・マグラ』は次のような順で並んだ原稿からなっている。

- 一、キチガイ^{じごくげ どうさいもん}地獄外道祭文
- 二、正木博士のインタビュー記事（二編）
- 三、論文「胎児の夢」
- 四、正木博士の遺言書

この後に、遺言書を書いた当人である正木博士がポカン君の目の前に現れるという形でさらに話は続いていく。

久作は若林博士の口を借りて、この構成が「正木博士が精神科学の大道を開拓すべく生涯を賭して研究して行かれた痛快な事跡が、たやすく順序正しくお解りになる」⁴⁾ように並べられたものだとして述べている。

一と二は、人間精神に対する科学の無理解が引き起こしている現状についての久作の考えを伝えている。どちらもふざけたような調子の文体で書かれているが、これが正木博士の研究の動機を説明すると共に、久作の『ドグラ・マグラ』執筆の動機も説明している。ポカン君というニックネームは二のインタビュー中に出てくるものだ。

この一と二の「解説」によってどのような認識が得られるかを、簡単にまとめてみよう。

4) 『夢野久作集』275頁。

「キチガイ^{じごくげどうさいもん}地獄外道祭文」をつくったのは面黒楼万児^{めんくろうまんじ}という人ということになっている。これは正木博士の変名であるらしい。理学・哲学・文学の博士号をもつ坊主である彼は、世界中をまわって見聞きした文明社会における精神病院の実状を、戯れ歌にして人々に伝えようと各地をまわって歌い、同時にそれを活字にして配っている。歌われているのは、科学文明の問題点が精神医学といわれているものにはっきり現れているということである。それは次のような内容である。

今は文明開化の世の中で、科学知識が万能とされる時代である。精神医学の本を見ると、病名がずらりと並んでいるが、それをありがたがるのは素人だけである。なぜなら人間の脳がどのような働きをしているかが全く解明されていないからである。だから「何が何して何じゃらかじゃら。浪花節なら前置きばかり。エライ議論が出ておりますけれど。たしかな事実の一つもわからん」⁵⁾ということになる。

根本である人間の心の認識があやふやなまま精神病の「治療」を行うのだから、それはさまざまな問題を引き起こす。精神病の「治療」とは、患者に病名をつけて、閉鎖病棟に監禁するというだけのことである。厄介な人物を、医者に金をつかませて患者にしたてあげたりということも起こってくる。

面黒楼万児氏は、人間の脳の作用を見抜いたのは「問わず語りでおこ^{おこ}がましいが。ここにおりますわたくしばかり。」であり、こうした事態を打開すべく、「世界各地の博士や学者を。アッと言わせる研究仕遂げて。二十億万人類社会の。アタマの入れ換えするのが楽しみ。」だと抱負を述べる。⁶⁾彼はそのために論文を書いているというが、それが正木博士の「脳髓論」であろう。この論文自体は『ドグラ・マグラ』には出てこないが、その内容は正木博士のインタビューの中で簡単に述べられている。

「脳髓論」の骨子は、脳はものを考えるところではないということである。人間が意識している「欲望、感情、意志、記憶、判断、信念なぞいうものの一切合財は、われわれの全身三十兆の細胞の一粒一粒ごとに」こもっていて、脳はそれを「反射交感する仲介の機能だけを受け持っている細胞の一団」にすぎない。⁷⁾

各細胞にこもっている意識とは、地球に生命が発生してから人間にまで進化

5) 同書、285頁。

6) 同書、285頁。

してきた間の記憶である。脳の反射交感作用が何かの原因で弱まったとき、そうした記憶が遊離して現れるのが精神病の正体であると正木博士は言う。面黒楼万児氏、つまり正木博士は、祭文歌にでてくるような「治療」でなく、「薬使わず手術もしませぬ」⁸⁾という解放治療を行おうとしている。

さて、「脳髓論」の内容は、インタビューで正木博士が話したある精神病患者の演説に出てくるものである。彼はアンポンタン・ポカン君、この論文で主人公の名前として使っているポカン君であるが、彼は「脳がものを考える」という考えが近代社会の行き詰まりをまねいていることに恐怖する。

吾輩・・・アンポンタン・ポカン君はこの脳髓文化の現状に気がつくと同時に、歯の根が合わなくなった。この恐怖戦慄に価する脳髓社会の光景を人知れず嘲笑しているポカン君自身の脳髓の冷たさを自覚すると同時に、左右の膝頭の骨がガタガタと外れそうになったのだ。この脳髓のトリックをタタキ破って、脳髓に対する汎世界的の唯物科学的迷信をドン底から引っくり返して、かくも残忍、悽愴をきわめた大恐怖ノンセンス劇の興業を停止させずにはおられなくなったのだ。⁹⁾

ポカン君の演説は、最後に自分の脳髓をたたきつけるような身振りで終わる。つまり彼の敵である脳髓をやっつけて自分ものびてしまうのだ。

以上が一と二の、内容の概略である。主人公の方のポカン君と共に原稿の「解説」に導かれる読者につきつけられるのは、精神病患者のおかれた過酷な現状と、それをもたらした科学文明の人間の心についての無理解である。文体や構成が錯綜しているとはいえ、メッセージ自体は、率直に投げ出されていると言えよう。

同時に、メッセージを伝えようとする姿勢が、作品の形式自体に組み込まれているという点も見逃せない。祭文歌は木魚をたたいて人々に訴えかけ、同時にパンフレットを配る。博士のインタビューは新聞記者に向かって、自分の研究内容を話す。ポカン君の演説は、彼が妄想で見ている観衆に向かって、自分が発見したことを訴えかける。いずれも誰かに何かを伝えようとする人の一人称という形式が共通しているのである。

7) 同書、341頁。

8) 同書、303頁。

9) 同書、337頁。

このようにメッセージははっきりしているように見えるのだが、あちこちに単純な解説を拒否するような工夫が見られる。例えばポカン君の演説を受けて正木博士は次のように言う。

しかもその上に、もう一つオマケのお慰みとしては・・・「脳髓が物を考える」という従来の考え方を、脳髓の中で突きつめてくると「脳髓は物を考える処に非ず」という結論が生まれて来る・・・という事実はもうわかったとして、その「考える処に非ず」をもう一つタタキ上げて行くと、トドのつまりがまたもや最初の「物を考えるところ」に逆戻りして来るという奇々妙々、怪々不可思議をきわめた吾輩独特の精神科学式ドウドウメグリの原則までおわかりになるという・・・この儀お眼止まりましたならば、よろしくお手拍子・・・¹⁰⁾

虚構の科学とはいえ、そこから人間の心は科学では読み解けない深みがあるという認識を得たと思ったら、それが今の引用によって元の木阿弥で、まさしく「ドウドウメグリ」なのはどうしてだろうか。

また、こうしたことを語る一人称の名前自体も同様にメッセージの単純な受け取りを拒否するものとなっている。面黒楼万児は「面食らうなよ」の意味だし、正木敬之は「正気けえこれ」とよめる。アンポンタン・ポカン君は文字通りである。作者である夢野久作という名前も、「ぼんやりした人」を指す方言であるから、ポカン君と似たようなものである。つまり、こうした名前は、全体が冗談のようなものだというメッセージを発しているのである。

このように解説を要請しつつ、その解説を不首尾に終わらせるような工夫が凝らされているのが『ドグラ・マグラ』の特徴である。それがどのような「解説」への方向付けなのかは、最後に触れることにする。

ポカン君の行う演説は次に置かれている「胎児の夢」の内容への導入の役割りも果たしている。「胎児の夢」は論文の体裁を取った短いものだが、生命の本質は何か、人間精神の真の姿はどういうものかを説明したもので、『ドグラ・マグラ』全体の要となっている。

次にこれの「解説」を試みようと思う。

10) 同書、361-62頁。

3 胎児の夢

人間を人間の形にするための情報は、細胞内の DNA に書き込まれている。人間の一番の始まりである受精卵は、この情報を「解読」することで一粒の細胞から胎児になり、誕生後も成長し、生き続けていくのである。その意味で、生命のもっとも核心部分にあるのが情報の「解読」であると言えるわけである。人間は成長後も、遺伝子内の生物学的情報を「解読」しつつ新陳代謝を行っていくのだが、同時にさまざまな記号体系を「解読」することで社会的存在としての自己を更新していく。『ドグラ・マグラ』の中で正木博士は遺伝学や夢についての知識、あるいは狐憑きなどの民俗学的伝承を「解読」することで科学的記号体系としての論文「胎児の夢」をまとめたとされている。細胞による「解読」、虚構の人物である正木博士の「解読」、そしてそれを読むことを期待されている読者による作品の「解読」、これらは生命が自らを維持発展させていく営みとして共通のものであるとの認識を、久作は抱いていたのではなかろうか。「胎児の夢」に限らず、『ドグラ・マグラ』の構成の複雑さは、読者をそのような「解読」の営みへいざなうためのものであると思われる。

「胎児の夢」で久作は、遺伝情報の解読という科学的、客観的な表現を使わず、それを「細胞の記憶力」という、細胞という生命の最小単位のもつ主観の立場から言いかえた表現を使っている。そこに科学的、客観的なとらえかたでは、個々の生命が主観的に体験したことを見落としてしまうという、久作が『ドグラ・マグラ』に込めようとしたメッセージがうかがえる。胎児の見る夢という設定は、そのようなメッセージを伝えるための虚構である。作中で述べられる理論およびその虚構性と、久作が求めた「解読」の方向付けを区別して、以下説明したい。

(1) 論文「胎児の夢」による正木博士の解読

作中で正木博士が証明しようと試みているのが、「心理遺伝の法則」である。『ドグラ・マグラ』の犯罪は、この仮説を証明するために計画されたものだ。これがどのようなものか、以下簡単に説明してみたい。

胎生学によると人間も含めた動物の胎児は、生物の進化の過程を母胎内で繰り返す。また胎児が胎生に要する時間は進化の度合に応じ、人間は十カ月と最も長く、単細胞生物は全然時間を持たない。一方、夢についての我々の知識によると、夢の中にはしばしば見たこともないような景色が現れ、また一瞬のうちに何時間何日何年という長い時間の経験を夢にみることができる。これらの

事実から正木博士は、胎児に進化の過程を繰り返させるものは胎児が母胎の中で見ている夢である、という仮説を導き出した。胎児は一瞬のうちに何億年分の先祖の記憶を体験しており、それが形になって現れたのが胎生の過程というわけである。我々が夢で見る景色はかつて我々の先祖が実際に見たものなのだというわけである。

胎児は原始の海に浮かぶコアセルベートが進化した最初の単細胞生物から自分の親の代に至るまでの先祖の記憶を、実際に夢の中で体験しており、時計的時間ではほぼ十ヵ月の間とはいえ、そこで何億年もの時間を生きている。その間の記憶は誕生の瞬間に「胎児の潜在意識のドン底」に押し込まれる。こうして現実の意識が前面に出るのだが、先祖の記憶はそっくり残っており、脳が疲れたりしたときなど何かの拍子に当人の意識を押しつけてその人物を支配してしまう。これが「心理遺伝の発作」である。

論文「胎児の夢」は、形式的にも文体的にも科学論文のコードをおおむね模倣している。論理的にも筋は通っており、『ドグラ・マグラ』という虚構の世界を維持する上では何の問題もない。しかし、この正木博士による生命の「解説」自体も、当然虚構である。祖先の記憶自体は、遺伝することはあり得ない。それはじっくり考えてみればわかることだ。例えば、この理論では祖先の死ぬ間際の記憶も子孫に遺伝していることになっているが、子供を産んだ後の体験まで遺伝されるというのは無理がある。¹¹⁾

このように、正木博士の「解説」自体は、現実世界において真理ではない。しかし、日記の中で久作は、「儒仏耶一途、心理遺伝の原則にて一貫す。」¹²⁾と書いている。儒教、仏教、キリスト教などに、彼が『ドグラ・マグラ』の中で考案した「心理遺伝の法則」にあたるものが見られるというのである。これは「胎児の夢」の「備考」の中で、こうしたことは数千年前のエジプトの宗教をはじめとして多くの宗教で説かれているとあるのに符合する。

現在世界各地に余喘^{よぜん}を保っているいわゆる宗教なるものは、こうした科学的

11) 同様の理論として思い浮かぶのが、ユングの心理学である。ユングは個人の無意識のさらに奥に「集合的無意識」があり、祖先の記憶が伝わっていると言った。これは祖先の個人的体験が遺伝するということではなく、似たようなイメージを生み出す傾向のようなものが遺伝するという話である。久作はユングについても知っていたようなので、参考にしたのかもしれない。

12) 『夢野久作の日記』268頁。

の考察を粉飾して、未開の人民に教示した儀礼、方便等の迷信化された残骸である。だからこの胎児の夢の存在も、決して新しい学説でないことを説くにここに付記しておく。¹³⁾

「心理遺伝の法則」はあくまでも虚構の科学であるが、久作自身によるさまざまな宗教の「解説」を反映しているのである。

(2) 科学のコードのデコダージュ

次に、「胎児の夢」によって久作が示した「解説」の方向付けについて考えてみる。

「胎児の夢」は、『ドグラ・マグラ』の構成の種明かしになっている。前に述べたように、読者が彼のメッセージを正確に「解説」するための手がかりが残されているのだ。その一つは、1ですでに触れた夢についての説明である。もう一つは、時計的時間と本当の時間の違いの説明である。本当の時間とは、個別の人間が主観的に感じ取るものである。例えばおしゃべりをしている一分間と、水に潜って息を止めている一分間は、時計的時間では同じだが、主観的に体験されたものとしては後者のほうがはるかに長いものである。さらに死人が死んだ後に感じる時間というものを考えれば、それは「一秒時間も、一億年も同じ長さを感じているはず」だという。これは一瞬の時計の音の間に様々なことを体験する『ドグラ・マグラ』のしくみの説明ともなっている。¹⁴⁾

このように「胎児の夢」は『ドグラ・マグラ』理解の手引きになっているのだが、その中で主観的体験に徹底してこだわっている点も見逃せない。今述べた真実の時間についても次のような一節がある。

真実の時間というものは、普通に考えられている人工の時間とはまったく別物である。むしろ太陽、地球、その他の天体の運行、または時計の針の廻転なぞとは全然無関係のままに、ありとあらゆる無量無辺の生命の、個々別々の感覚に対して、同時に個々別々に、伸縮自在さをもって静止し、同時に流れているもの……ということが、ここにおいて理解されるのである。¹⁵⁾

13) 『夢野久作集』383頁。

14) 同書、379-81頁。

15) 同書、381頁。

論文の最後に、胎児が見る夢がどんなものか正木博士が推測した内容が書いている。その部分は、それまでの科学的コードの模倣をかなり逸脱した、細胞を主人公とする短編映画の実況といった感じで書かれている。それは限らない喜びと地獄のような苦しみを感じながら、ただひたすらに人間へ、人間へと向かおうとする一粒の細胞の主観を描いている。

細胞はまず「生暖かい水の中を浮遊している夢」を見始める。そしてぼんやりと自分たちのはかなさ、せつなさ、美しさなどを感じていると、水のわずかな変化によって「形容に絶した大苦痛」が起こり、仲間もどんどん死滅していく。その中で、「ああどうかしてモット頑丈な姿になりたい。寒さにも暑さにも堪えられる身体になりたい」ともがいているうちに、魚の姿になる。一息ついていると、今度は様々な外敵に襲われる。それで今度は陸に上がりたい、「あの軽い、明るい空気の中で自由に、伸び伸びと跳ね廻られる身体になりたい」と祈っていると、トカゲのような姿になる。¹⁶⁾この調子で猿になり、人間になるのだが、引用部分からもわかるように、進化の次の段階への変化をもたらすのは、力の弱いものの主観が発する痛切な祈りである。

「胎児の夢」で論じられている理論はあくまでも虚構である。だが、その「理論」およびそれを土台にして語られる進化の物語は、外側から見た科学的認識によるのではなく、一つ一つの生命の主観的な体験に重点を置いてものを見ることが重要なのだという久作のメッセージをはっきりと示している。

久作は様々な科学的ないしは伝承などの非科学的記号体系を「解説」しつつ、胎児が母胎の中で見ている夢という主観的体験に生命の根源を見出した。それは科学に可能な限り即しながら、そのコードから脱出する方向を示すものである。

4 心理遺伝による犯罪

「胎児の夢」に続くのは、「空前絶後の遺言書」である。正木博士が自殺の理由を述べ、彼の精神科学のヒントになることを書き遺そうとしているらしいこの原稿は、その中に呉一郎の犯罪についての多数の証言、それについての正木博士による「精神科学的観察」など、様々な原稿を含んでいる。さらに続いて、ポカン君が原稿を読み終わると、自殺したはずの正木博士本人が姿を現し

16) 同書、385-87頁。

て、彼に様々なことを話す。この遺言書と正木博士の話の二つ、それぞれ中に複数に枝分かれした話を含んでいるので二つといえるかどうか分からないが、それらを読むと呉一郎が関わったとされる母と許嫁の殺人事件、およびそれと大昔の中国の画家である呉春秋の事件とのつながりといった、探偵小説として見た場合の『ドグラ・マグラ』の本筋がわかるようになっている。しかし、これは全体の三分の一にも満たない量でしかなく、探偵小説の構成として実に異例であると言える。これらの原稿の「解説」は、どのような認識を読者にもたらしのだろうか。

(1) 呉春秋と呉一郎

呉一郎の犯罪は彼の祖先である呉春秋の体験した出来事の「心理遺伝」によるものである。『ドグラ・マグラ』の順序とは食い違いが、まずこちらから見よう。

呉春秋は玄宗皇帝の時代の天才的な画家である。社会の乱れに憤りを感じ、自らの絵の力によって皇帝を諫めようと、^{たい}黛夫人に死を納得させ、山中にアトリエを築いて移り住み、夫人を絞殺した。その後、彼女の死体が腐乱していく様子を描いたが、死体の腐乱が予想以上に早く進んだため思い通りの絵を描けなかった。そこで、町へ出ては他の女性を襲ったり、死体を掘り出したりといった行為に及ぶ。本人は忠義の心でいっぱいなのだが、周囲は当然そうは見ない。やがて隠れ家を発見され、追い出されて元の家に戻ると、妻の双子の妹である^{ふん}芬がそこで待っている。彼女は自殺しようとする彼を押しとどめ、玄宗皇帝も楊貴妃も謀反で殺されてしまったから、二人でどこかへ逃げようと言う。二人は苦難の末、当時の渤海国から日本へ貢ぎ物を届ける渤海使の船団に拾われる。途中で春秋は行方不明になったが、芬は彼の子を身ごもっていて、そのまま日本へ渡る。以上が正木博士がポカン君に語った呉春秋をめぐる話である。

この事件を正木博士は、次のように「解説」する。呉春秋は自分では世のため、忠義のためと思いこんでいたが、その心理を解剖すると「燃え立つような名誉欲」「焦げつくような芸術欲」さらに「沸騰点を突破した愛欲、兼、性欲」が見られる。¹⁷⁾つまり、芸術家として世間を驚かせるような作品を描きたい、そして名声を得たい、また自分を愛している妻を殺すことによって、さらなる性的刺激を得たいというような心理である。また、妹が姉の新婚時代の紅い服

17) 同書、653頁。

を着て、姉の家で青秋を待っていたり、彼に玄宗皇帝と楊貴妃のために祈りながらどこかで暮らそうと持ちかけるのは、これも自覚はしていないが義兄に恋いこがれる心理であるという。さらに、問題の絵巻物に描かれた黛夫人の死んでいく様子については、それを描きながら青秋は「その全身の細胞の一粒一粒ごとに、張り裂けるほど充実感銘させていたことと思う」¹⁸⁾と言っている。これは、頹廢的な心理を、3で論じたような個々の生命の主観的な体験の切実さまで遡ってとらえようする、久作によるデカダンス文学のデコダージュといふべきものである。

呉一郎は、この呉青秋の子孫であり、彼の家系はその絵巻物を見ると「心理遺伝」の発作を起こし、祖先の青秋の行動を繰り返すという特徴があった。彼の顔に中国人の特徴が見られることは、正木博士の遺言書で骨相学的に「解説」されている。

彼の第一の犯罪は母親の千代子を、夢遊状態で殺害したというものである。呉一郎本人、伯母の八代子、母が教えていた裁縫塾の塾長の三人の談話と W（つまり若林）の法医学的所見を正木博士が「解説」したものから、読者は彼の犯罪をうかがい知ることができる。

彼の犯罪は、呉一郎としての「有我的意識（脳髓の覚醒時に於ける意識作用）」¹⁹⁾が起こしたものではなく、「同人の脳髓の作用、すなわち意識的精神作用が熟睡に依って休止しおる間」に、その代用となった「全身の細胞相互間の反射交感作用」²⁰⁾が行ったものである。一郎に事件の記憶がないのはそのためである。彼は母親の寝顔による暗示で軽度の「心理遺伝」の発作を起こしたのだ。また、暗示が夢中遊行を引き起こすほどの影響をもったのは、何者かが彼に麻酔薬をかがしたからと推定される。その根拠は一郎の談話にある大きな音で、これは音ではなく麻酔から覚めたときの心理の急変が音と錯覚されたものであると正木博士は推定する。

第二の犯罪は、祖先の芬夫人に生き写しの従妹（八代子の娘）であるモヨ子を、何者かに絵巻物を見せられて起こった発作によって殺害したものである。この時一郎は呉青秋と同じ心理状態になっていた。犯行の大筋は、八代子の雇い人である戸倉の談話から読みとれるようになっている。

18) 同書、655頁。

19) 同書、500頁。

20) 同書、499頁。

(2) 知的認識と個々の主観

呉一郎の犯罪は、このようにいくつもの断片的な談話や解説によって浮き彫りにされるという形をとっている。裁縫塾の塾長や雇い人のように事情をあまり知らない人もいれば、八代子のようにおよその経緯がわかっている人もいるし、若林博士や正木博士のように事件に関与しつつ素知らぬ顔でいる人もいる。さらには自らが実行していながら、その間の記憶が全くない、加害者兼被害者の呉一郎の談話もある。このようにいろいろな視点を取り入れることによって、同じ一つの事件が実に多様に意味づけされた形で読者に呈示されるのだ。ジェイムズ・ジョイスやロレンス・ダレルの小説の構成法を思わせる。

呉一郎の犯罪自体は身の毛もよだつものである。狂気の描写は迫力があり、書いている久作も呉青秋のように、異様な光景を描く情熱に翻弄されているかのようだ。また、正木博士の解説に顕著だが、ろくろ首、狐憑き、火車などの妖怪伝説を、「心理遺伝」の見地から一郎の事件につなげて「解説」といったこともしており、そうした久作の知識の広さとそれらを論理の糸でつなぐ手際の鮮やかさは見事である。

このように多くの視点によって犯罪の輪郭を浮き彫りにすることによって、まず第一に、実際の真相が曖昧になるという事態が生じる。例えば、一郎が母親を殺したかどうかという点などがそうである。正木博士の解説ではそう見えるが、後で博士がポカン君に告白しかけたところによると、一郎に絵巻物を見せた人物（暗に博士自身を指す）が邪魔者を取り除くために千代子を殺し、それを隠すためにろくろ首などまで持ち出したのだということになる。真相はいずれともつかないのである。

さらに、こちらの方が久作の真の狙いと思えるのだが、それぞれの視点から事件をかたることで、そのひとりひとりの主観的な思いが作品を通して浮かび上がってくるのである。例えば、第二の発作後の伯母八代子の発言に次のようなものがある。

わたしの傷はかまいません。生命^{いのち}も何も要りません。どうぞどうぞお願いでございますからこの絵巻物を（・・・と固く秘めたる懷中より取り出して渡しつつ）お寺から盗み出して一郎に渡して、この家中の者を取り殺そうとたくらんだやつを、ゼヒゼヒ探し出してくださいませ。そうして其奴が見つかりましたならば、タッター一言でよろしゅうございますから、何の怨みでこのようなムゴイ事をしたのかと（^{すけりなき}涕泣）タッター一言でよろしゅうございますからキットお尋ねくださいませ（^{すけりなき}涕泣）・・・一郎が正気でおりますうちに

その人間の事を尋ね出し得ませなんだのが残念で残念で・・・²¹⁾

この頼みは若林博士といるときに、彼に対して言われたものである。この必死の思いも、犯行の片棒をかついだ若林博士によって「第四参考」という項目に分類されて、心理遺伝研究の資料にされてしまったわけである。しかし、それを「解説」する読者には、この八代子の視点から語られる主観的な思いが伝わる仕組みになっている。このように、様々な談話から読みとれるのは、「胎児の夢」の細胞の主観と同じく、個々の生命の主観的な気持ちの切実さである。

そのような気持ちは、それを科学の材料と見る立場とははっきり対立するものである。それは、正木博士の話を聞き終わったポカン君が、博士に向かって言う言葉に表れている。博士は自分の行為に良心の呵責を感じ、自分に代わってポカン君に心理遺伝の研究成果を発表してもらおうとするが、ポカン君はそれを断り、次のように言う。

先生方は、そんな学術研究でも何でも好き勝手な真似をして、ご随意に死んだり生きたりなすったらいいでしょう。・・・しかし先生方が、その学術研究のオモチャにしておしまいになった呉家の人達はドウなるのですか・・・²²⁾

ポカン君は若林博士と正木博士に、呉家の人々に謝罪するように求める。そうしてくれたら、自分が罪を引き受けてでもこの研究を引き継いでもよいと言う。しかし、正木博士はポカン君の言葉に激しいショックを受けて、部屋を出ていってしまう。

5 正木博士が出ていった後の時間のパラドックス

正木博士が出ていった後、ポカン君は絵巻物を眺め、その最後に千代子の和歌があることに気づく。それは子供の父親が正木博士であることを示すものであり、また子供に心理遺伝の実験をしないように願う気持ちがこめられていた。それを読んで動転したポカン君は、病院の外に出て街をさまよい歩く。やがて、絵巻物をそのままにしてきたことを思い出した彼は、正木博士が和歌を

21) 同書、550頁。

22) 同書、729頁。

見たらショックを受けるだろうと思って、病院にとって返す。すると、そこで彼は予期せぬ事態に遭遇する。

ほんの数時間前出てきたばかりだというのに、午前中に自分が読んだはずの書類や風呂敷包みの上に厚く埃がたまっている。正木博士と飲んだはずのお茶や、正木博士の葉巻の痕跡もなくなっている。自分が読んだ絵巻物も（このときすでにポカン君の記憶力は弱っていて、自分が何をしにもどってきたか思い出せないでいるのだが、）新聞紙に包まれ、それを動かすと机の上にそこだけ埃がたまっていない跡が残った。

ポカン君は啞然となった。彼は自分の記憶を確かめるつもりで風呂敷包みを点検するが、書類の一番下に午前中に見たときにはたしかに存在しなかった新聞の号外があることに気づく。それは正木博士が海に身を投げて自殺したという記事であった。

こうした時間のパラドックスについて、ポカン君自身が作中で自ら「解説」を行う。それは次のようなものである。

(1) 主人公による「解説」

ポカン君は窓の外と部屋の中を交互に見渡し、その瞬間に「いっさいの真相が、氷のように透きとおって」見えてきた。

・・・不思議ではない。

・・・チットモ不思議ではない。

・・・わたしは今朝から二重の幻覚に陥っていたのだ。正木博士のいわゆる離魂病にかかっていたのだ。²³⁾

ポカン君の解釈によれば、彼は一カ月前の十月二十日に、同じように記憶を取り戻し、今日と同じように『ドグラ・マグラ』を読んだ。その後正木博士にあったのは、実は今日ではなくて一カ月前の自分である。一カ月前に体験した出来事が今朝からの出来事、若林博士の暗示、そして『ドグラ・マグラ』を読むことによって潜在意識からわき上がり、正木博士と実際に会ったような錯覚を呼び起こしたというのが今日の体験の真相である。

23) 同書、773頁。

今日の午前中、わたしがいろんな書類を夢中になって読んでいるうちに、若林博士がコッソリと立ち去った後にはこの室の中に誰もいなかったのだ。正木博士も、禿頭の小使も、カステラも、お茶も、絵巻物も、調査書類も、葉巻の煙も何もかも、みんなわたしの一カ月前の記憶の再現にすぎないのだ。たった一人で夢遊中の夢遊を繰り返していたにすぎなかったのだ。²⁴⁾

結局、被害者兼名（迷？）探偵であるポカン君によるこの「解説」と、これまで見てきたような「解説」を合わせると、この事件の解答は次のようになると思われる。

犯人・・・正木博士と若林博士。もっとも、殺人の実行犯は呉一郎である。犯罪の元になる理論を発見し、実行に移したのは正木博士である。だが、正木博士はポカン君に言われたことがこたえてか、あるいは絵巻物の最後にある和歌にショックを受けてか、自殺してしまった。その後を受けてポカン君に暗示を与えて記憶を取り戻させ、精神医学という知の世界での名誉を得ようとしているのが若林博士である。

動機・・・抑圧されている精神病者と抑圧的である社会で暮らしている人々を解放するための、新しい精神医学を確立しようというのが、二人に共通の動機である。しかし、対象となる心理遺伝の法則は彼ら自身にも作用していて、学会での名誉、ライバル間の意地、知的好奇心、美しい千代子への欲望などといったものに振り回され、彼ら自身にも研究の方向を制御できなくなった。つまり、呉青秋と同じように、いつしか彼らも正義のためという表向きの理由の下で、名誉欲、性欲などのからまりあった心理に翻弄されるようになった。

主人公の正体・・・呉一郎。父親は正木博士である。

以上のようになるであろうか。探偵小説の種明かしは野暮ということになっているが、『ドグラ・マグラ』は読み終わっても犯人が定まらない点に特徴がある作品であり、犯人を知ることによって興味が失われることはないであろう。また、上に記したのは、作中人物による解答であり、夢野久作による読みの方向づけを考えるとさらに奥があると思われる。次にそれを考えてみたい。

24) 同書、775頁。

(2) 先行研究における「解読」

『ドグラ・マグラ』は、完成を拒むテキストである。ポカン君は上のような結論に達した後、自ら監禁病棟に戻り、自分のベッドに横たわる。そして、これは全て胎児の夢なんだ、と心の中で考えながら、「ブーン……」という朝と同じ時計の音を聞くとところで物語は終わる。

犯人と犯罪の全貌は、どうやら見えてきたとはいえ、ポカン君自身、自分の本当の名前が何なのか、完全な確信は持てないままで話は終わるのだ。これはどういうことなのだろうか。なぜ久作は、はっきりポカン君の記憶を取り戻させ、呉一郎であると確信したという形で話を終えなかったのか。この点に久作の読みの方向づけがあるように思う。

これまでの研究で、この点はどのように読まれてきたか、簡単に整理してみよう。

夢野久作の戦後における再評価のきっかけを作った鶴見俊輔氏の論文では、『ドグラ・マグラ』は、自分をさがす探偵小説である。²⁵⁾とされている。そして、正木博士の「犠牲としてえられるのが、自分の子（らしき男）」²⁶⁾という書き方から、その「自分」が誰であるかは最後まで明らかにならなかったという読み方をしているようである。その点についてははっきり論じてはいないが、鶴見氏は久作に現れている右翼思想（国粹主義・国家主義への転向前の民族主義）の特色の一つに「徹底的唯名論」を挙げている。それは「自分をつねに虚においてみる。名前のつく前の自分の部分から考える」²⁷⁾というものである。

国家の規定する自分、会社、学校、家の規定する自分よりも深くに、おりてゆくと、祖先以来の民族文化によってつくられた自分があり、さらにその底に動物としての自分、生命、名前なき存在としての自分がある。そこまでおりていって、自分を現代社会の流行とは別の仕方で再構成し、新しく世界結合の方法をさがす。²⁸⁾

25) 鶴見俊輔「ドグラマグラの世界」西原和海編『夢野久作の世界』（平河出版社、昭和50年）所収、140頁。

26) 同書、148頁。

27) 同書、146頁。

28) 同書、147頁。

このように考えれば、社会の規定する自分の名前を明らかにすることはさほど重要ではない。久作が主人公の名前を明確にしなかったのは、「徹底的唯名論」の反映であるというのが、鶴見氏の読み方だと思われる。

ポカン君が呉一郎であることは、はっきりしていると読む人もいる。塚本邦雄はこの話を「記憶の一切を喪った狂人が、ある精神病医の解放治療と称する実験材料になることによって、徐々に覚めつつ、怖るべき真相をさとり」²⁹⁾ものだと述べている。つまり、(1)で述べたポカン君によるデコダージュを、そのまま作品の内容と取る見方である。これが一般的な受け取られ方なのかもしれないが、久作が工夫を凝らしたのはこのような単純な解釈を阻止するためだったというのが、本論の趣旨である。

由良君美氏は、『『ドグラ・マグラ』は、カフカの『城』のように、『審判』のように、究極の犯人の正体は遂に不明のまま』であると言っている。主人公の名前どころか、犯人の名前すらも明確でないところに、久作のメッセージを読みとっているのである。「わずかに確からしいのは、自分にそのような夢中遊行の犯罪を計画させた〈何者〉かが、たしかに居る」ということであり、「〈個体発生〉のなかの〈系統発生〉の再現を、恐るべき遺伝の触発によって、『胎児の夢』として実現した誰かが居たからこそである、という認識」が、読者に伝えられるのである。鶴見氏は「動物としての自分、生命、名前なき存在としての自分」を新しい生き方の鍵ととらえていたが、由良氏の読みでは、「〈個体発生〉のなかの〈系統発生〉」としての自分の存在は犯罪の一部となっている。つまり、探偵小説の文脈で言えば、「動物から進化したものとしての自分」は、犯行のトリックにあたるものなのだ。久作が主人公の名前を明確にしなかったのは、系統発生につながるものとしての人間、そして人間を他の自然から分離した「脳髓の犯罪」、さらに呉青秀から正木、若林といった心理遺伝に振り回された個別の人間などの織りなす犯罪の匿名性へと読者をいざなう久作の読みの方向づけであるというのが、由良氏の見方であろう。³⁰⁾

(3) 読者によるデコダージュへの方向づけ

ポカン君の謎解きで犯罪の輪郭は明らかになった。久作による読みの方向づけを考える上で先行研究ではその点をどう読んでいるか調べてみると、(2)のようになった。ここでは最後にそれらを参考にしつつ、はじめに述べたような『ド

29) 塚本邦雄「異端者の系譜」西原和海編前掲書、156頁。

30) 由良君美『風狂 虎の巻』(青土社、1983年)、163-164頁。

グラ・マグラ』の構成上の特徴から、久作の読みの方向づけを考えてみたい。

『ドグラ・マグラ』はその中に『ドグラ・マグラ』という原稿を読む主人公を含むという構成を取っている、いわゆるメタ性をもつ小説である。その意図は、作品に込められたメッセージを主人公と共に読みとってもらいたいということだと考えられる。読者は作中の『ドグラ・マグラ』を読んだポカン君の体験を、『ドグラ・マグラ』を読むことで体験する。その二重化した体験を通じて、究極的な名前の不在に直面する。鶴見氏のいうように、それは社会の与える自我を拒否し、民族性、動物性に遡る体験であろう。しかし、それは唯名論という思想からくるというよりも、そのような体験を言語によって捉えることが、ほとんど不可能なくらい困難であるとの自覚からくるものだと思う。由良氏の言う「〈個体発生〉のなかの〈系統発生〉の再現を、恐るべき遺伝の触発によって、「胎児の夢」として実現した誰かが居たからこそである、という認識」は、読者に直接伝えられるというよりも、認識が拒否される体験への方向づけが作品の構成に組み込まれていることによって、逆説的に伝わるように工夫されているのである。

由良氏は『ドグラ・マグラ』を論じながらミシェル・フーコーを引き合いに出しているが、フーコーは『狂気の歴史』を書くに際して、その序文で「世界があのかごもった眩きの方へと耳を傾け、決して詩となることはなかったかくも多くのイマージュ、覚醒時の色彩に決して到達することのなかったかくも多くの幻想を、身をかがめて垣間みようとつとめなければならない。」とその姿勢を説明している。そして、それは二重に不可能な使命であるとも述べている。なぜなら、そのような眩き、イメージ、幻想などは、それ自体現実の言語の中に占める場を持たないし、またそれが言語化され、与えられるのは、精神分析的な知のシステムのような「告発し支配する分割の身振り」の媒介が不可避だからである。³¹⁾

文学は精神分析のような知のシステムに狂気を閉じこめることはないが、言語によって対象を捉える作業には変わらない。久作が『ドグラ・マグラ』で最終的にポカン君の名前を明らかにしたならば、それは狂気「について」の作品となっただろう。つまり、狂気の体験、理性と狂気の分割が行われる地点、フーコー風に言えば理性と狂気を「同時に結びつけかつ分離する、あの決定」³²⁾へ

31) 小林康夫他編『ミシェル・フーコー思考集成』Ⅰ（筑摩書房、1998年）、200頁。
（『狂気の歴史』初版への序）

の遡行とはならなかっただろう。

しかし、そうする代わりに久作は、主人公の名前を示さず、至る所にパラドックスをちりばめ、可能な限り多様な文体を、つまり多様なコードを駆使することで、作品自体を単一の「解説」が不可能なものに仕上げた。読者に求められているデコダージュは、「解説」である以上に「脱コード化」の主観的な体験なのである。『ドグラ・マグラ』は奇書であるといわれ、難解である、よくわからないと言われがちである。しかし、本体の内容よりも、読者へ要求するデコダージュの質の方が、読者への高いハードルとなっているのではないだろうか。久作はそれを自覚していたから、探偵小説的な興味によって読者を惹きつけ、様々な手がかりによって読者を方向づけ、幻惑的な体験そのものであるメッセージをつかんでもらおうとしたのである。

注

文中の『ドグラ・マグラ』の引用は、『夢野久作集』創元推理文庫、日本探偵小説全集4（東京創元社、1984年）を使用した。三一書房の全集を使用しなかったのは、創元推理文庫版の方が表記が新しいからである。全集版は参考にとどめた。

32) 同書、200頁。